

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

MARCH 1978

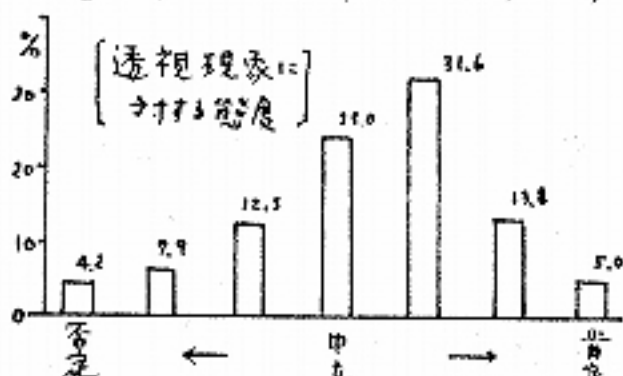
No. 3

Psi に対する心理学的アプローチ

後藤ひろ子

Psi に対する被験者の態度と心理特性が ESP テストの結果と如何に関係するかを調べた。態度調査は筆者自作の質問紙、心理テストは MMPI, 価値観テスト、早稲田版 I-E テストを使用、ESP テストは BT 法 1 x 8 runs (200 trials)、被験者は女子大学生、態度調査を 240 名に、ESP テストと心理テストは、その内の 60 名について行った。

結果：テレパシー、透視、予知、念力等の現象に対し何れも 50% 以上の者が肯定的態度を示している(右向き参照) 興味・関心も 66.6% の者が示している。



Psi に対する関心の日常行動に対する反映、Psi の体験の程度を調査し「日常行動点」としたが、これは、MMPI の Ma (軽躁性尺度) Dq (非行性尺度) と有意な関係がみられ、Psi に対する態度と I-E 尺度、興味関心の程度と Pd (精神病質的偏倚性尺度)、日常行動点と D (抑うつ性尺度) Ma, Dq 価値観テストの宗教型、それらの間に有意な関係がみられた。

ESP の得点と Psi に対する態度との間には顕著な関係はみられなかった。ESP テストの高得点者と低得点者との間には、Hs (心気症尺度)、I-E 尺度の差において有意な差が認められた。また、Pd (精神衰弱性尺度) と Dq とともにその尺度の高得点者と低得点者との間に、ESP 得点に関し有意な差が認められた。

考察：以上の結果から、透視現象等は偶然の現象ではなく人間の能力であるという仮説が支持された。透視能力の発現は心理特性と関係があると考えられる。心理特性を示す尺度を 2 つ以上組合せることにより、ESP 得点との関係はより明瞭になると思われる。日常行動に関する質問紙と ESP 能力の予測可能性を増大する研究が必要である。(BB 和 52 年度卒業論文) — 2 月月例研究会にて発表 —

第 11 回大会準備委員会より

8 月 5 (土) 6 (日) の西日南西地帯で開く大会の会場及びテーマを近く決定し連絡致します。つきましては、多数の皆様「研究発表」をお願ひしたいと思います。お申込みお待ちしております。なほ大会に引き続き 7 日 (月) 8 (火) 9 (水) 3 日間「夏期研修会」を開催致します。

会務報告

第 122 回月例研究会

1978 年 3 月 10 日 1930 ~ 2100 学生会館本館に於て開催、出席者 6 名、第 11 回大会準備委員長より準備経過の説明、次回月例会を別途に具体的な計画を作成する旨の説明があった。大谷氏より「日台遠距離 ESP 実験」の実験計画作成経過の説明があった。Handbook of Parapsychology 輪読会の最初として、今次はよ 2 B. B. Wolman: Mind and Body の紹介、及び討論が行われた。

お知らせ

第 123 回月例研究会 を下記要領で行います。

1978 年 4 月 9 日 (月) 午前 10 時 ~ 午後 4 時
於 学生会館本館 第 4 号館 3-28, 03-292-5931
議題 第 11 回大会準備

日台 ESP 遠距離実験実施要領について

Handbook 輪読

Part IX Parapsychological Models and Theories

C. T. K. Chari: Some Generalized Theories and Models of Psi

Res Stanford: Conceptual Framework of Contemporary Psi Research
紹介者 金沢元雄

Part IV Parapsychology and Physical Systems

J. F. Nicol: Historical Background

紹介者 松田 幸

NEWSLETTER

1978 年 3 月 10 日 発行

編集・発行: 日本通心理学会

文献紹介 - 輪読会報告 1-

HANDBOOK OF PARAPSYCHOLOGY 1977
PART IX PARAPSYCHOLOGICAL MODELS AND THEORIES

4. Mind and Body : A contribution to the Theory of parapsychological Phenomena
by Benjamin B. Wolman p.861-879

紹介者 金沢元基

超心理現象の性質は物理的存在なのか、それとも非物理的存在なのか、その理論的論争は超心理学の内部だけでは解決不可能であり、精神身体的、身体精神的な隣接過程の由を検討する必要がある。人間が身体と魂の綜合体であるとする古典的の二元論は心身間のミニマケーションの複雑性を説明できなかった。この考え方は発展して現代ではゲンツワルト学流の心理物理同型説に引まわがれつつある。次に還元主義(reductionism)が登場し、根本的、期待の、論理的の三種がある。第一のものは心理学を神経生理学に還元し、意識は皮質過程における抑制と抵抗に因る物理的エネルギーの差にすぎない。Hullに代表される第二の立場は現在の所、心理学が還元しうる神経生理学は存在しないが、将来はそれが可能であると期待されるというもので、多くの心理学者が賛成している。Nagelは最後の立場をとり非還元科学の法則は還元科学の単なる論理的結果であるという。

心と身体が異なるか同一かを論議するたために同一という意味の吟味が大切であり、例えば、熱は運動エネルギーに変化し、事物に対し両者は互に相互作用の影響を及ぼす。それらは同一といえるが、連続性もつづいていく。移行主義(transitionism)は生物体に適用可能な一連の理論的構成概念の展開をめざす。それは心理現象と他の有機的過程の連続性として表す。Oという有機的過程はM、という条件下でMという心理過程に、MはMの下で有機体へ変化す。すなわち、 $O_{k1} \Rightarrow M, M_{k2} \Rightarrow O$ 。それは物質の進化と無機物質、有機物質、心理学的過程の三つに合致し、移行主義は此等の段階と進化と連続性の可逆的過程に結びつけた。ESPとPKは普遍的移行過程の特殊な事例にすぎない。超心理的現象は心と身体が互いに連続する領域であり、その間にありと無きものはない。それらは他の精神身体的、身体精神的過程の法則に適合する因子によつて決まるとする。

神経生理学における移行主義の立場に立つ研究者は心的過程は生理学的過程に還元不可能な高次レベルの発展を及ぼすことを強調した。Ecclesは皮質皮質に付する「意志」の働きを仮説を導出し、単一の神経細胞に影響する小さな意志の影響が脳活動の極めと大きな変化の引き金に存する理論を提唱した。彼はESPとPKを理論の中にとり入れ、超心理学の實驗結果を心と物質の間の「両面交通、および心と心の直接交通の証拠としていく。ESPとPKは自ら意識をして彼自身の脳に影響を及ぼすこと同一の原理の多く不規則なありかたである。一元論的移行主義はこれを説明不可能な領域を説明しようとする努力をする。その中に超心理学がある。超心理学を含め心理学研究における同類のものは人間が同列的存在であるという概念から出発していることである。しかし、人間の人間の環境因子により大きな影響を受けつつある。超心理現象は、知覚者、発信者、受信者、更に多数の他の因子に依存する。また、伝統的の因果関係は相互系にのみ適用可能であり、人間行動と宇宙の互にコミニケーションの中でとらえるとき、それは逆同それらの未知な。それらの存在は狭い一対一の関係の中では説明出来ぬから。共感やテレパシーは感情、知覚、思念などの心理学的要素の伝達であり、知覚者の身体精神的、精神身体的性質によつて促進され、将来の超心理学は'sensitives'を徹底的に研究しなくてはならぬ。

超心理的現象は、精神的か身体的か。それはどうなのか、あるいは両者である。それは変化における連続性の一例である。

著者紹介
Benjamin B. Wolman, Professor of Psychology, Doctoral Program in Clinical Psychology, Long Island University, Brooklyn, New York.